

「撰大乘論を読む」
大乘仏教の深層心理学
岡野守也

青土社

目次

序章 ブッダからアサンガへ 7

はじめに 仏教史の中の「摂大乘論」 日本仏教史の中の唯識 唯識の歴史の中の「摂大乘論」

「摂大乘論」の全体構造

第一章 心の深層にあるもの アーラヤ識とは何か 29

一 アーラヤ識の名称と本質

菩薩が知るべき迷いと覚りの根拠 情報集積体 アーラヤ識の三つの意味 命の維持・執着作用

凡夫は実体と錯覚する 自分への執着の源泉としての意 深層の問題としてのエゴイズム

汚染された意の存在の証明 集まったものとしてのへん心 勝れた人々菩薩のための学説

アーラヤ識の様相 習気・熏習 アーラヤ識と種子の循環関係

二 アーラヤ識の存在証明

前提としての十二縁起 アーラヤ識の二つの側面 説明概念としてのへん心

三 アーラヤ識の種別

アーラヤ識の程度と中立性 まとめ

第二章 世界を見る角度 〈三性〉とは何か 79

一 世界の見方の三つの相

依他性・依他起性 分別性・偏計所執性 真実性・円成実性 実体的認識と現象的認識

十一の差異性のカテゴリー

二 もの差異性と心

唯識の推論的理解——夢と目覚めの譬え

瞑想という臨床実験

方法論としての唯心論

唯識の三つの根拠

三 三性の分析

唯識説としての三性説 言葉と分別

分別の分類 分別と無分別智

三性の区別と関係

依他性と分別性 依他性と真実性

依他性の世界の比喩

真実性の四つの側面

黄金を含む地面の譬え

四 曹羅の特徴

第三章

心の変容の方法 〈唯識観〉とは何か

133

多聞熏習

覚りの条件

認識から瞑想へ

覚りへの段階

覚るための方便

覚りの程——唯識観

蛇と藤づるの譬え

唯識観の結果と目的

第四章

菩薩になる方法 〈六波羅蜜〉とは何か

135

「波羅蜜」の意味

布施

持戒

忍辱

精進

禪定

智慧

迷い・障害と方法の対応

修得の段階

終わりのない実践

実践の効果について

第五章

菩薩の発達段階論 〈十地〉とは何か

175

修行の完成にかかる時間

「果てしない修行」は現代人にとっても意味があるか

十段階の名称とその意味

十段階の構造

五位説と十地説の関係

第六章 菩薩の三つの学び 〈戒・定・慧〉の三学とは何か 199

一 菩薩の実行すべき戒律

二 禪定と心の学の関係

十種の難行

三 菩薩の得る智慧

五種類の無分別智でないもの 無分別智と後得智 無分別智はなせもつとも勝れた智慧なのか

第七章 究極の自由 〈無住処涅槃〉とは何か 229

大乗仏教は〈無住処涅槃〉を目指す 四種類の涅槃 転依——アラーヤ識の根元的変容 六種類の転依

生死はすなわち涅槃である

第八章 究極のアイデンティティ 〈三種の仏身〉とは何か 251

一仏と私の関係 仏の三身 三身説の現代的意味 法身の五種類の相 三身の区別と一体性

釈尊はなぜ死ぬのか 無常なる仏と永遠なる仏 法身・仏性と修行の問題

大衆仏教の深層心理学
「撰大衆論」を読む

序章　ブツダからアサンガへ

はじめに

『撰大乘論』は、四、五世紀頃に書かれたインド大乘仏教の理論書である。誰でも知っているという本でも、それほどわかりやすい本でもない。それどころか、これまでは仏教内部でもほとんど読まれてこなかった。仏教学者でさえ、ごく限られた専門家の方以外、ほとんど読んでいないようだ。

そういう特殊な本なのだが、私は、二十年以上前、たまたま縁があつて、自分の生き死にに関わる切実な問いへの答えを得られるのではないかと期待して手にした。初めは何が書いてあるのかさっぱりわからなかつた。しかし何としても理解したくて、繰り返し繰り返し読むうちに、ある時、突然という感じで全体像が見えてきた。全体像が見えた時、私が抱えていた切実な問いは、かなりみごとに答えられた（すべて・完全にというのではないが）。以来、読めば読むほど名著だと感じ、自分だけのものにしておかないで、その価値をせひ広く知らせたいと願つてきた（幸い、すでに『撰大乘論 現代語訳』（羽矢辰夫と共訳、コスモス・ライブラリー刊、星雲社発売）を出すことができたが、本書はそれに対する解説・紹介編に当たる。いろいろな事情が重なつて、執筆が予定より数年遅れたが、ようやくかたちにすることができた。お待ちいただいた読者には心からお詫

びしておきたい。なお、唯識ゆいしきの入門書としてはすでに「わかる唯識」(水書坊)などを書いてるので、まったくの初心の方はそちらを先に見ていただくと理解しやすいかもしれない。

「撰大乘論」はどういう意味で名著なのか、なぜそれほど広く知らせたいと願ったのか、一言で言うるとそれは私たち人間が生み出してきた様々な問題のもっとも深い原因と解決への道を明らかにしていると思われるからである。

私たち人間は、おそらく人間ニホモ・サビエンスとしての歩みを始めて以来ずっと、恐れ、苦しみ、憎しみ、争い、奪い合い、殺し合いといった様々な悩みや葛藤を抱えてきた。それは、捉え方によっては、ほとんど人間に必然的につきまとう解決不可能な「人間の運命」にさえ見える。

しかし「撰大乘論」は、それには原因があり、解決の道もあるのだと言う。確かに人間は遙かな過去から深い無明むみやうを心の奥底に抱えており、すべての煩惱ぼんのうはそこから生まれるのだが、にもかかわらず無明・煩惱は超えうる、覚りが可能なのだと言う。人間は、心の奥底から変容し、様々な煩惱を越えることができるというのが、「撰大乘論」の基本主題であり、メッセージである。そういう意味で言えば、究極の人間成長論と言ってもいいだろう。

叙述の古めかしさ、難解さをクリアして内容を読み解くことができれば、そこには驚くほど普遍的で、現代にも通用する、それどころかあらゆる面できつまっている現代にこそ必要な英知が語られていることがわかる。有史以来と百つてもいいほどの過去から人間が心の深層に抱えてきた問題をみごとに抉り出し、その解決の方法をも提示しており、それは仏教内部でしか通用しないようなものではなく、特定の宗教を超えた普遍的な妥当性を持っている。そこで、私はあえて「大乘仏教の深層心理学」という言い方をしている。その実際の内容を、私の理解と文章力の及ぶ範囲で解きほぐし、その英知を多くの読者とわか

ち合っていききたいと願っている。

仏教史の中の「撰大乘論」

内容に入る前に、歴史的な事柄を理解の前提として必要最小限の範囲で述べておこう（必要のない方は飛ばしていただいてかまわない）。

よく知られているように、仏教は紀元前四、五世紀または五、六世紀、ゴータマ・ブッダに始まり、その死後いくつもの派に分かれた「部派仏教」になる。部派仏教は主に出家・専門僧の仏教で、やがて紀元前後、それは自分の覚り・救いだけを求める小さな乗り物ニ小乗だと批判し、自分たちの道こそ、自分も他者ともに救われる大きな乗り物だと主張する「大乘仏教」の流れが興る。

そうした原始仏教から部派仏教、そして大乘仏教という流れの中で、膨大な文献が生まれ、積み重ねられた。それらは、伝統的に「経・律・論」の「三蔵」に分類されている。釈尊その他の仏が説いた教えが「経」であり、釈尊が定めた修行者が守るべき戒律が「律」であり、釈尊が説いたことやそれ以後の深まりを後の学僧が理論的に精密化したものが「論」である。

中国ではそれらのサンسكريット語原典に通じ、翻訳を行なう大学僧を「三蔵法師」と呼ぶ。「三蔵法師」と呼ばれた学僧は何人かいるが、特に有名なのが「西遊記」のモデル玄奘三蔵で、実は玄奘もこの「撰大乘論」の翻訳を行なっている。

大乘仏教には多くの論書があるが、まず龍樹（ナーガールジュナ）が空の思想を説いた「中論」、それから無著（アサンガ）の「撰大乘論」、さらに馬鳴（アシュヴァゴシヤ）の「大乘起信論」（中国で作られたという説もある）などが代表的だとされる。

ところで一般的には、仏教はインド―中国―日本と伝えられたというイメージがある。それはある意味でそうなのだが、インドの仏教が日本にそのまま伝わったわけではない。まず中国に伝わって変化・発展する。大きな変化・発展の時代だった梁、北魏、隋、唐の時代にかけて、中国的に変容した仏教が、最初は朝鮮を経由して、後に直接に中国から日本に伝えられた、というのがより正確である。

日本には、まず空の思想を説く三論宗系の仏教が伝えられたようだ。唯識は公式には二番目に、白鳳から天平にかけて遣唐使を通じて導入されたものであり、宗派としては「法相宗」という。そして現在、三論宗は宗派として残っていないから、唯識は日本に伝えられ現存している最古の仏教の派だということになる。

唯識を学び教える宗派・法相宗は、現在は奈良の興福寺と薬師寺を両本山としている。かつては法隆寺や京都の清水寺なども法相宗に属していた。これらはみな有名な寺だが、それが唯識の寺だということを知る人は多くない。

そのように、唯識は日本に伝わり残っている仏教の派としてはもっとも古いのだが、いくつかの理由があつて、これまで一般にはほとんど知られてこなかった。

日本仏教史の中の唯識

唯識がなぜ知られなかったか、日本仏教史の流れを簡単に振り返ってみよう。

奈良仏教に続いて、奈良時代末に中国に留学した空海、最澄が、それぞれ真言宗、天台宗をいわば輸入し開創する。それは、いわゆる平安時代の始まりと重なっており、天皇や平安貴族たちの支持を得て大きな勢力となっていく。

それから、鎌倉時代に、法然、親鸞、栄西、道元、日蓮、一遍といった、いわゆる鎌倉仏教の祖師たちが、よくも悪くも仏教を日本的に変容させ、武家や民衆に支持されるような、新しい仏教の流れを生み出していく。

現在まで統一している日本仏教の各派の大半は、そうして鎌倉時代にはほ出そらい、江戸時代、徳川幕府の宗教政策によって、それ以上新しい派を作ることが禁止され、固定されていく。そして、江戸時代の時点で大きな勢力をもっていたのは、浄土宗、浄土真宗などいわゆる浄土系の仏教や日蓮宗、あるいは曹洞宗といった鎌倉仏教と、平安仏教では真言宗などであったようだ。そうした勢力分布も、檀家制度によって、当然、固定されていた。その勢力分布の傾向は、幕末、明治以降、新しい宗教の創始が可能になってからも、基本的に現代まで統一しているようだ。

こうしたことの結果、一般には、仏教というとまずすぐに、地獄・極楽、そして「南無阿弥陀仏」という念仏か、あるいは「南無妙法蓮華経」という題目がイメージされるということになった。そうでなければ、「加持祈禱」や「願かけ」などによる御利益信仰が仏教だと思われているのではないだろうか。

それに加えて、近代では、地獄・極楽や輪廻という一種の神話や御利益信仰など、近代的な考え方と一致しないものを全部はずしてしまっても成り立つ禅宗が、いちばん純粋な仏教だというイメージもできた。よく知られているように、「京都学派」と呼ばれる哲学者たち、西田幾太郎、田辺元、加えて世界的に有名な禅学者鈴木大拙、その弟子筋にあたる久松真一、西谷啓治といった人々が、西欧の哲学と対比しながら禅を高く評価したことが、そうしたイメージを作り出したといっていだらう。

そうした、浄土系か日蓮系か禅宗系、いずれにしても鎌倉仏教が仏教の主流だというイメージに対して、梅原猛は「仏教はそれだけではない。密教もある」と、加持祈禱とは別に空海そのものの生命の肯定の思

想を高く評価した。空海が評価されると、同じ平安仏教の天台宗の最澄の再評価の声もあがるようになった。

そうした事情で、明治以来の日本の文化・教養の世界では、鎌倉仏教からやがて平安仏教までは、いろいろなかたちで再発見・再評価がなされてきたといっているだろう。

もう一方、明治以後、近代西欧の文献学・歴史学的な古典研究の影響を受けた仏教研究によって、そうした日本仏教とはかなりニュアンスの違う、ゴータマ・ブッダ以降のいわゆる原始仏教やインドの大乗仏教の姿が明らかになってきた。そうしたインド仏教のバリー語やサンスクリット語からの現代語訳もかなり増えている。

さらに最近では、いわゆる精神世界・ニューエイジの影響や、中沢新一などの紹介や、ダライ・ラマのノーベル平和賞受賞の影響もあって、チベット密教もかなり注目されるようになっていく。

ところが奈良仏教は、聖徳太子を別にすれば、いまだに東大寺の大仏、法隆寺の夢殿、百済観音、興福寺の五重の塔……といった観光、美術観賞のレベルでしか知られていないのではないだろうか。唯識・法相宗や華嚴宗の教えは、いままで一般の方々にはほとんど知られないうままにまわっているといっている。しかし、最近は一一般の説書人もフロイドやユングなどの深層心理学の入門的な知識はかなり知っているようになり、ふりかえると日本、東洋には唯識学という仏教の心理学があったことに気づきはじめていく。そうしたわけで、唯識に関心を持つ方々もだいぶ増えてきて、唯識関係の一般書、啓蒙書もかなり出るようになった（私自身も「わかる唯識」水書坊、「唯識で自分を変える」すずき出版、「唯識のすすめ」NHKライブラリーなど、入門書、啓蒙書を書いてきた）。関心も広がっているし、知識も少しずつ広がっている状況ではあるが、しかしそれでもまだ、「撰大乘論」まで進んで読もうという人はなかなかいないようだ。

「撰大乘論」は、おそらく四、五世紀ころに存在したアサンガ（三九〇—四七〇、別説三一〇—九〇）という学僧（ぎんじ）の名著である。サンスクリット原語の“*Asaṅga*”の“a”は「くなく」、*saṅga*”は「つかまえる、執着する」という意味で、合わせて「執着が無い」という意味である。「無着（むじやく）」あるいは「無著」と漢訳されている。

「撰大乘論」の「撰」は、原語のサンスクリットは“*saṃgraha*”で「包摂する、全部を包括的に把握する」ことを意味しており、「大乘」は“*mahāyāna*”で「大きな乗り物」という意味である。つまり、自分一人が救われる小さな乗り物ではなく、衆生みな一緒に救われようという大きな主張を持っている、そういう「大乘仏教の本質を包括的に把握する」という、タイトルからしてきわめて大きな構えの本である。

大乘仏教は、まず釈尊以外の自ら覚った者（じ）仏であるという自覚を持った人々によって生み出され、その中で釈尊の名を借りたもの、別の仏の名によるものも含め、様々な新しい「経」が作られていった。ところが、派として発達してくると、おそらく部派仏教への対抗という意味もあったのだろう、次第に高度な論理化が行なわれていく。その過程で、まず空の思想がナーガールジュナ（龍樹）によって「中論」などの「論書」で大成されていった。

ところが、現に日本の伝統の中でも誤解があるくらいで、「空」とか「無」と言うと、すぐに言葉の印象にひっかかって、「では人生ぜんぶ空しいのか」「何にも無いのか」「何にも無いと言っても、現にこうして世界があるのではないか」といった誤解や疑問や反論が出てきた。「空」と言われても、世界を見る

とやはり「ある」ように見えるし、「無」と言われても、自分は生きているし、そここにいろいろな物があると思える。確かに、それがある意味で「現実」である。

そういう実際にものが現象していることと空・無ということはどういう関係にあるのか、それを心という面から体系的に明らかにしたのが唯識である。

唯識は、早めに見つものと二、三世紀頃、「解深密經」などの「經」に始まる。それを、四、五世紀から六、七世紀にかけて、マイトレヤミトレヤ・彌勒ミレ、アサンガアサンガ無着、無着の肉親の弟でもあるヴァスバンドゥヴァスバンドゥ世親セケンという、三人の論師が体系化していった。

そういう発展・体系化の歴史で言うと、「撰大乘論」は中期の古典である。唯識の理論体系は、「成唯識論」つまり「唯識を完成する論」と呼ばれる論書において大成されたと言われる。そういう意味で言えば、「撰大乘論」は、唯識思想という山脈にあって、「成唯識論」の一つ手前のそれに並ぶ高峰に譬えられるだろう。

「成唯識論」は、中核部分はヴァスバンドゥ世親セケンが作った「唯識三十頌」という短い詩文の綱要書で、それに対して後のインドの学僧たち十人が注釈書を作った。玄奘三蔵は、そのすべての写本を持って帰ったのだが、弟子の慈恩大師チエン基キ（窺基ともいう）が、すべてを訳すと、後の学習者たちが混乱するから、正しい一つの説にまとめようと提案し、相談しながら、それらを取捨選択して一つにとりまとめ、いわば編訳したものだといわれている。これが法相宗ほっそうしゅうの基本的經典・論典とされていて、日本の法相宗でも、これを中心に唯識が研究されてきた。

だから、唯識の完成された体系・全体像を見るためには、「成唯識論」と「撰大乘論」両方を読むことが望ましいのだが、法相宗では「成唯識論」がいわばメイン・テキスト、「撰大乘論」はサブ・テキスト

とされてきた。そして、『成唯識論』自体、きわめて難解なものであるため、それをマスターするだけでも大変な労力と時間が必要で、どうしてもサブ・テキストは、「本当は研究したほうがいいのだが、そのうちに」と思っているうちに、本格的に読まないまま終わる。法相宗内部でも、そういうケースが多かったようで、『成唯識論』の注釈書は多く作られたが、『撰大乘論』の注釈書はほとんどない。

『撰大乘論』は、唯識の重要な古典であり、タイトルに恥じない、大乘仏教の全体像を唯識学的な考え方からきわめて体系的に述べた名著なのだが、そうした様々な事情が重なって、ほとんど読まれてこなかった。

もう少しだけ、歴史的な話を続けよう。

インドで、無着、世親によって唯識学が大成される。大成されて間もなく、真諦三蔵しんたいさんざう（バラマールタ）というインドの学僧が中国にやってきて、『撰大乘論』の訳を行なう（もう一種類訳があるが煩瑣になるのでふれない）。そうした翻訳によって唯識が学ばれ、それを学ぶ「撰論宗」という学派も生まれる（私は、真諦の訳が、サンスクリット原典に忠実かどうかは別に、その内容が靈性の書としてきわめて勝れていると感じるので、本書では、この真諦訳を私が現代語訳したものを使う）。

ところが、その後八十年近くたって、玄奘三蔵は真諦三蔵らの翻訳で勉強し、非常に心惹かれたが、どうもよくわからない箇所があったという。そこで、サンスクリットの原典を見て、その疑問を解決したいと思つて、志を立て、国外に出ることを禁じた国禁を犯して、あえてシルクロードの命がけの旅をしてインドに行った。そして、唯識のサンスクリット原典を中心に、様々なお経を持って帰ってくる。『西遊記』の影響があつて、「玄奘三蔵はインドからお経を持って帰った」というイメージが強いのだが、何のためにインドへ行ったかという点、一番の動機は唯識を原典で学びたい、原典が欲しいということだった。

ようだ。

そして、多くの経や論を持って帰ってくると、当時の中国にとっては、いわばインドの最先端・最高の文化を持って帰ってきたことになり、国内の事情が変わっていたせいもあって、国禁を犯したのにもかかわらず許され、待遇も変わり、それを訳するための寺まで建ててもらい、助手も大勢つけてもらって、翻訳の事業を始めた。

ちょうどそこに、唐の文化をとり入れようとしている日本の遣唐使の留学生が行って、玄奘からじかに唯識を学んで持って帰ってきた。その中には、道昭（大仏建立に貢献したことで知られる行基の師にあたる）や藤原鎌足の長男定恵も含まれていた。

このあたり歴史としてはドラマがあつて非常に興味深いのだが、「撰大乘論」に関しては、不幸なこと
にこのプロセスで読まれない条件ができてしまった。

つまり、玄奘三蔵は真諦三蔵の翻訳を読んで不満（内容ではなく翻訳になのだが）があつたから行つたわけだ。そして帰ってきて、自分が最高だと思つたものを「成唯識論」という形でまとめた。「撰大乘論」も翻訳し直してはいるが、メイン・テキストは「成唯識論」である。特にその弟子の、法相宗を實質的に立ちあげた慈恩大師基が、これをはっきりと法相宗の依りどころとなる經典にする。そこで、「撰大乘論」はいわば脇に置かれてしまった。そして法相唯識が日本に入ってくると、完全に玄奘訳「成唯識論」の唯識こそ正しい唯識だという扱いになり、真諦三蔵訳の「撰大乘論」は、サブ・テキストのさらにサブ・テキストという位置に追いやられてしまった。

そしてそこに平安仏教が重なり、鎌倉仏教が重なり、近代の日本の仏教の再評価が、先に述べたような形で行なわれてきて、「撰大乘論」、特に真諦訳はいわば読まれない条件がどんどん重なつてしまったので

ある。

ただ、仏教学の内部では、衛藤即応の「本論は陳、隋、初唐の間にいわゆる撰論宗として講究せられた以後はほとんど独立にこれを研究する者なく、多くの末釈すらくごとく失散して伝わらず、特殊の学者以外には、教界ですらまったくこれを忘れていた状態であった。しかし……本論は実に組織整然たる大乘仏教概論である」(『撰大乘論釈』) 国訳一切経瑜伽部九、解題、現代表記に変えた」という発言もあり、宇井伯寿の、古い唯識思想を研究する上で真諦訳の「撰大乘論」が重要であるという評価もあつたが、あくまで学界内部のことに留まっていた。

今は幸いなことに、長尾雅人先生の労作『撰大乘論 和訳と註解』上下(講談社、一九八二、八四年)が出ているので、素人でもなんとか読んでみることはできるようになった。しかし、それでも「誰でも読めばわかる」というわけにはいかないし、これもチベットの語訳とやはり主に玄奘の漢訳をもとにしている。

そうした状況に対して、一般の読者が「撰大乘論真諦訳」に触れていただけのよう、すでに述べたように、私も現代語訳を刊行している。しかしそれでも、きわめて凝縮された内容があまりにも簡潔に述べられているので、解説・注釈なしには、理解が困難だろう。本書は、いわばそれに対する概説入門書である。現代語訳と対照しながら読んでいただけると、いっそう理解が深まると思う。

「撰大乘論」の全体構造

以上、やや長い前置きだったが、少しずつ内容の紹介に入っていきたい。各部分の解説に入る前に、まずおおまかに『撰大乘論』の全体構造を見ておこう。そのほうが全体としての理解がしやすいと思うからである。幸い『撰大乘論』第一章に、全体の見通しができる、目次にあたる部分があるので、長くなるが、

全文引用しておく（拙訳三八―四〇頁、以下引用は頁数のみを記す）。最初はざっと目を通し、本文が進むにつれて、全体像があいまいになる度に、ここに戻って確認していただけるといいと思う。

もろもろの仏・世尊には、十の勝れた相があつて、説くところは比較するものがなく、他の教えにまさっている。十の勝れた相とは、

- 一、知られるべき「ことの」依りどころの勝れた相
- 二、知られるべきことの勝れた相
- 三、知られるべきことへの悟入の勝れた相
- 四、悟入の原因・結果の勝れた相
- 五、悟入の段階の区別の勝れた相
- 六、修行の相違の中で特に、戒律による学の勝れた相
- 七、心（瞑想）による学の勝れた相
- 八、智慧による学の勝れた相
- 九、学びの結果としての涅槃ねはんの勝れた相
- 十、智慧の相違の勝れた相、である。

この十項目の勝れた相のゆえに、如来の説くところは他の教えにまさっている。このように経の文章を注釈して、大乘が真に仏の説であることを明らかにする。

また次に何のためにこの中でおおまかに注釈して、大乘が他の教えにまさっていることを明らかにするのか。今、ここで、おおまかに注釈して、この十項目の内容は、大乘にのみあって、小乗の中にはないことを明らかにするのである。

では、何を十項目というか。

① いわゆるアーラヤ識を「知られるべき〔ことの〕依りどころ」と名づける。

② 三種類の「存在認識の」性格、一には依他性、二には分別性、三には真実性、これを「知られるべき

こと「存在認識」の相」と名づける。

③ 唯識の教えを「知られるべきことへの悟入」と名づける。

④ 六波羅蜜を「悟入に到るための方法」と名づける。

⑤ 菩薩の十の段階を「悟入の段階の区別」と名づける。

⑥ 菩薩が受け守る禁止・戒めを「修行の違いにおける戒による学びの相」と名づける。

⑦ 首楞伽摩・虚空器などの禪定を「心による学びの相」と名づける。

⑧ 無分別智を「智慧による学びの相」と名づける。

⑨ 無住処涅槃を「学びの成果としての寂滅の相」と名づける。

⑩ 三種の仏身、自性身と応身と化身という三つを「無分別智の成果の相」と名づける。

こうした十種の理はただ大乘にだけあって、小乗と異なっている、それ故に第一であると説く。仏世尊は、ただ菩薩に対してのみ、この十の真理を説くのである。それ故に、大乘によってのみ、もろもろの仏世尊に十の勝れた相があり、説くところは等しいものがなく、他の教えにまさることになるのだ。

また次に、なぜ十の勝れた相の説かれたところとは等しいものがなく、大乘が如来の正しい説であるこ